文系講義科目における CEAS 活用

―「西洋古代・中世哲学 a」―

関西大学文学部哲学専修　　中澤　務

（１）はじめに

語学や演習など、比較的少人数のクラスで実施され、学生の密接な交流が必要とされる授業において CEAS が極めて有効に機能することは明らかであろう。では、講義科目、とりわけ比較的多人数で実施され、教員からの一方的な情報伝達に陥りがちな文系の講義科目において、CEAS をどのように活用すれば授業の活性化と教育効果の向上を達成できるのであろうか。

私はこうした関心から、2006 年度の授業において、実験的に CEAS をできるだけ利用した講義科目の運営をしてみた。具体的には、春学期実施の「西洋古代・中世哲学 a」と秋学期実施の「西洋古代・中世哲学 b」である。本報告は、そのうち、春学期に実施した「西洋古代・中世哲学 a」の授業に関わる報告ならびに考察であるが、秋学期も基本的に同様の方法で授業を展開している。

（２）「西洋古代・中世哲学 a」について

この科目は、「哲学史」という伝統的分野を取り扱う専門科目であり、哲学の歴史的知識の伝達を目的としている。毎年開講され、50～80 名前後の受講がある。2006 年度は、火曜２時限に開講し、受講者は 45 名（秋学期の「西洋古代・中世哲学 b」は 68 名）であった。哲学専修の選択必修科目であるため哲学専修の受講者が多いが、他専修からも一定数の受講者があり、西洋古代思想の歴史というテーマに引かれて受講する、歴史や西洋文化に関心を持つ学生も多い。

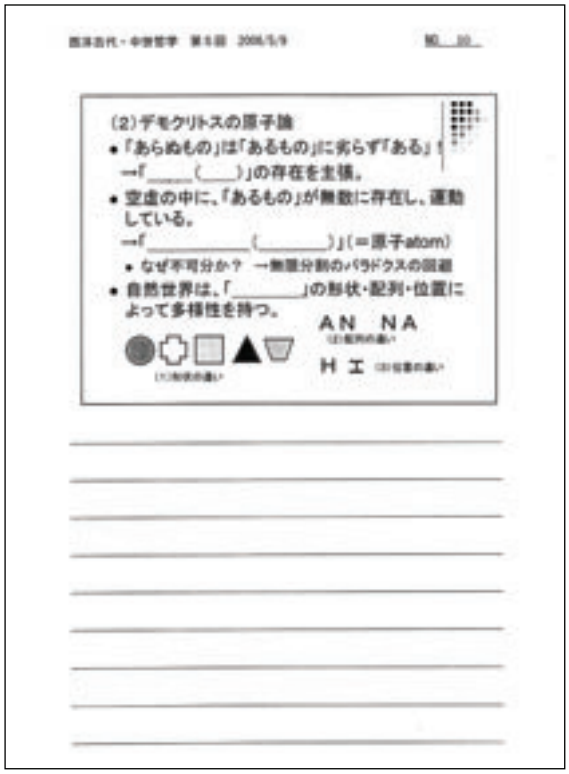
（３）授業の実施方法

2005 年度以前の本科目の授業方法は、至ってオーソドックスなものであり、参考資料（通常は B4 版で２枚程度）を配布し、話をしながらポイントを板書していくというものであった。この方法は、学生の授業への積極的な参加を促すのが難しいというデメリットがあり、結果として、授業においては、比較的熱心に授業を聴く学生と、授業には参加するが板書も取らず話もほとんど聴いていない学生の二極分化が目立っていたことは否めない。また、成績評価の方法は論文試験によるものであった。その結果とし

て、授業にはほとんど出席せずにレポートだけ提出して単位を取得する学生が一定数存在していた。こうした成績評価をめぐる問題も、今回 CEAS の利用を試みた理由の一つである。

以上のような状況を少しでも改善するため、2006 年度の授業は主に次の２つの新しい方法を試してみた。

①配布資料と板書による授業を止め、代わりにパワーポイントのスライドに話の内容を整理し、これに説明を加えるかたちで話を進めた。さらに、学生のノート・テイキングを促すために、パワーポイントスライドの重要部分を空白にしたノートを用意し、パワーポイントの表示を見ながら配布ノートのブランクを埋めつつ、解説を聞いて細かいポイントをノートしてもらった。(配布資料も含め、すべての配布物を CEAS にアップしたが、パワーポイントスライドはブランクの入ったもののみを掲載し、授業を休んだ者が自分で学習するように促した。)



配布ノートのサンプル

②論文試験による成績評価を取りやめ、CEAS を使った試験に統一した。すでに述べたように、論文試験では、学生が毎回の授業にきちんと出てきて話を聞いていたのかを正確に判断することは難しい。私は、授業成績は、学生の授業への積極的な参加と授業を通しての知識の向上に対して与えるべきものと思うので、その点をしっかりと計れるような試験をおこなうことにした。具体的には、毎回の授業終了後から一週間以内に回答する選択式のミニテストと、記述式テストを計３回実施した。ミニテストは、その回の授業の内容をまとめた文章のブランクに入るキーワードを選択肢から選ぶというものであり（5 点満点)、記述式テストは、授業の内容から５つを出題し 100～200 字程度でまとめさせるというかたちにした(10 点満点)。ミニテスト１３回、記述式テスト３回で、合計 95 点となるので、残り５点分はアンケートを実施し、回答者に与えるというかたちにした。

（４）CEAS 活用の効果

①理解度・満足度の向上：この授業の話の内容自体は、基本的に 2005 年度と 2006 年度はほぼ同一である。しかし、内容が整理されたパワーポイントスライドと、書き込

みやすいように工夫したノート配布により、授業内容が分かりやすいと感じる受講者の数が増加した。ちなみに授業アンケートの結果を比較すると、質問２において、2005 年度は評価平均 3.9 ポイントと、文学部の平均を少し上回る程度であったが、2006 年度は 4.7 ポイントに向上している。また、授業に対する満足度（質問８）も、3.8 ポイントから 4.4 ポイントに向上した。

こうした結果は、パワーポイントを中心にした授業方法の工夫の成果はもちろんだが、CEAS での資料配布や、毎回の試験実施などの影響も大きいと考える。CEAS を中心として授業全体を有機的に設計することで、こうした向上が見られたものと思われる。

授業アンケート結果（抜粋）の比較

	質問内容	2005 年度	2006 年度
1	授業内容は、講義要項、授業計画等で示したものに沿った内容でしたか。	4.2	4.5
2	授業内容について、わかりやすくする工夫がなされていましたか。	3.9	4.7
4	学生の理解を深めよう、能力を高めようとの熱意・努力が感じられましたか。	3.6	4.3
5	教科書・配布資料の利用は適切でしたか。	4.1	4.6
8	全体としてこの授業を受講して満足しましたか。	3.8	4.4
9	この授業を通じて、知識が深まった、能力が高まったと感じますか。	4.0	4.4
10	あなたはこの授業によく出席しましたか。	4.0	4.3
11	あなたは予習・復習するなど、この授業に意欲的に取り組みましたか。	2.9	3.8

※数字はいずれも回答者全員の評価平均

②成績評価の合理化：ここで「合理化」というのは、労力の削減だけでなく、授業にきちんと出席し話を聞いた者に高い評価を与えるという公平性の確保も含む。CEAS による試験の実施によりこの点はかなり向上した。気になったのは、毎週 CEAS にアクセスして問題を解く学生の負担感であるが、CEAS を通して利用したアンケートの結果では、学生の負担感は予想以上に小さかった。また、こうした成績評価の方法に対する学生の評価も予想以上に肯定的であった。実際、選択式テストも記述式テストも、授業内容の理解度のみを問い、実際に授業に出席した者と出席せずに問題を解こうとする者の間で点差が出るように工夫している。こうした成績評価方法は、学生にとっても透明かつ公平なものなのであろう。得点分布も、100 点から 0 点まで合理的な分布になり、しかも、授業にきちんと出席している学生ほど高い点数になるという明確な傾向が見られた。

（５）今後の課題

CEAS の導入は、文系の講義科目においても、様々な面で教育効果の向上につながることが明らかとなった。最後に、2007 年度以降の授業において試みたい課題を述べて、まとめとしたい。

授業方法を改めたことによって、出席率はやや向上したが、まだ十分なものではない。試験方法などを工夫したが、不十分である。強制ではなく、学生に自発的に授業に参加してもらうためには、授業に対してより強いコミットメントを持ってもらう必要がある。そのために考えているのは、BBS と FAQ の有効活用と、CEAS を使った予習システムの構築である。これらの工夫を加えることで、2007 年度の授業をよりいっそう充実させたいと考えている。